旭混声合唱団の皆さんへ

～少し遅い自己紹介～

神谷 伸行

はじめに

今回ご縁があって旭混声合唱団の皆さんと一緒に音楽をさせていただくことになりました。改めましてよろしくお願いいたします。

私は音大や芸大出身ではないいわゆるシロウトですが、シロウトなりに精一杯やりたいと思っています。初めは手探りでなかなかうまくいかないかもしれませんが、よろしくご協力下さい。指揮者としての理想や音楽観などについて、自分の音楽歴を織りまぜながら申し述べたいと思います。

①自分なりに目ざすもの

・歌っていて気持ちがいい、聴いていて気持ちがいいコーラス

・心のこもった、あたたかい、良い音楽

・合唱団としての理想は、「古今東西の幅広いレパートリーが歌えること」

②同志社グリークラブと二人の師

私が入団した時の同志社グリーは、人数がやや少なく決して好調とは言い難い状態でした。学生指揮者としてまず行ったのは音程に対する清潔感を中心とした基礎練習の徹底です。よく「アマチュアには技術は無いがハートがある。その情熱が技術不足という欠点をカバーするのだ。」と言われますが、団員のメンタルな結び付きさえあれば、ステージで突然神風が吹いたりしてそれまで一度もハモったことがない箇所が絶妙なハーモニーを聴かせる、ということはめったになく、たとえあったとしてもそれは初めから望むべきことではありません。またそうだとすれば練習など必要ないということになります。私の恩師、故福永陽一郎先生は指揮者ﾌﾙﾄﾍﾞｯﾝｸﾞﾗｰの信奉者でした。ステージは積み重ねた練習の成果を発表する場ではなく、生きた音楽がその瞬間その瞬間に脈打つ場であるという演奏スタイルは、まさに切れば血が出るような往年のドイツの巨匠のそれに通ずるものがありました。しかしそれは同時に、とてもそういうレベルに達しきれない一般大学生の集団には過酷なものを要求しました。先生の棒について行くためには、どんな棒にも対応できるよう楽譜をしっかり読み、基礎練習を積むしかないと考えたところから、私の仕事は始まったのです。それまでのグリーには随分気合いや張ったりで乗り切ってきた部分がありましたが、この姿勢を改良しようと取り組みました。

演奏にはどうも流派のようなものがあって、一例として関西学院グリーと同志社グリーの演奏スタイルを紹介しますと、前者は生け垣の刈り込みのように整然とハーモニーを揃えるのに対し、後者は自由奔放、ハーモニーやバランスをあまり考えずに声を出しまくる（無論福永先生がそれだけを良しとしていたわけではありませんが）という伝統がありました。野球に例えれば、ランナーが出れば必ずバントで手堅く送るようなきっちりプレーのチームと、ホームランあり、暴走タッチアウトありのハラハラプレーのチームというところでしょうか。私自身は、何より声を出すというのが最初にある自分の”チーム”のプレーぶりが実は大好きなんですが、ただそれまでの基礎的な部分をあまりにもないがしろにしながら続けてきた、裏付けの無い、確実性に欠ける演奏を善しとするクラブの風潮はどうしても改善したかったのです。理想を言えば、”外見（＝ハーモニー、音程、バランスなどの音楽に関する基礎的要件）”と”内実（＝音楽表現に関わるメンタルな部分）”の両面を兼ね備えた集団が理想ですが、なかなかそうはいきません。結局、練習に於ける指揮者の仕事というのはこの二つのレベルをいかに高く維持するかということに集約されるという結論に達し、内実をいかにうまく引き出すかということを押さえながら、まず”外見”の充実を心がけました。もっと言えば、福永先生に”外見”に関しては絶対に練習をさせない、”内実”のみを求める練習でありたいという気構えです。その甲斐あってか、先生にはその年、めったにない澄みきった音程、ハーモニーという準備の良さの上に仕事をすることができた、と言って頂けました。ただ、外見だけが良くても中身がなければ聴いている人に感動を起こすことはできません。「感心」よりも「感動」をいかに起こすか？また、外見にこだわりすぎると今度は、きれいではあるが迫力のないこじんまりとした演奏になってしまう。それが以降の課題として残りました。

大学卒業後、その福永先生の紹介で入門させて頂いたのが平野忠彦先生（東京芸大教授）で、もう10年程声楽を指導して頂いています。レッスンはまず自分自身の発声法の矯正から始まりました。ポイントは、一般的に非常に多く見られしかも自分では上手いと思い込んでしまう喉詰め声から、喉をよく開いた自然な声への転換です。舌根に力が入らないようにして、鼻に十分響かせ、お腹の支えを下方に保持するという基本を徹底的に教えられました。そして、これはもちろん福永先生からも多大な影響を受けたのですが、音楽する心。「天・地・人」という表現があります。それぞれ、響き・支え・音楽する心に対応し、これらがバランスよく充実するようになるにはやはり相当の訓練が必要です。早く「人」の域に達したいのですが、初めの二つで精一杯、なかなかそこまで行きません。人間の声こそ最高の楽器であるといわれますが、これは曲を理解し、その本質をメッセージとして聴衆に伝え、何がしかの感動を生むためにきちんとトレーニングをつんで初めて最高の”楽器”になることは論を待ちません。人間に感情があるのは当たり前であって、それを伝える媒体をいろんな方法で磨き、表現の幅を広げることが大切なのです。甲子園の高校野球でも、基礎練習をきちんとこなしているチームはエラーやミスが少なく、伸び伸びとプレーを楽しんでいるのです。

③心のこもった音楽を

しかし、それでは技術偏重ではないか、との声が聞かれそうです。そうではなくて、我々日本人が西洋の音楽を”楽しむ”レベルに達するにはある程度の苦労を避けては通れないということであり、苦労が目的なのではないのです。より良い音楽を展開、発信するために技術を磨いても、なかなかうまくはいきません。でもその努力は苦役ではなく、より良い音楽を目標とするからこそ意味がある。楽譜に「ｆ」と書いてあるから「ｆ」で歌う、「cresc.」と書いてあるから「cresc.」するというのではなく、その符号の持つ意味を考えて演奏しなければ心の通った音楽は生まれないと思います。合唱の場合は歌詞が付いているので、なぜここが「ｐ」なのか、なぜこの音符にアクセントが付いているのか、などということは比較的説明が付き易いのですが、本当にその言葉をイメージして歌っているのか疑問に思う演奏会が非常に多い。演奏して聴衆に何かを伝えるということは実は大変な作業であり、決して自己満足に終わってはいけません。美しい、大きな、暗い、しめやかに、すばらしい‥言葉を単に音符に付けて発音するだけでなく、心からその言葉を言おう、聴く人にしっかりと言葉を伝えようという姿勢で歌うことが大切なのです。例えば、「”赤い”という日本語の意味

を知らない外国人が、それを聴いてただちに”red”だとわかるくらいに”赤い”と歌え」と言ったのは浅井敬壹氏ですが、少しオーバーだとしてもそれくらい必死になってちょうど良いのではないかと私も思います。例えば歌詞に”weite Welt（広い世界）”とあれば、”weite”の所はその単語の意味から、「広い」空間を心にイメージして、喉を広く開けて体全体の力を抜き、ドイツ語を知らない人にも「広々とした感じ」が少しでも伝わるようにのびのびと歌うべきでしょう。

練習については、いろんな方法や考え方があるかと思います。が、音楽面で大きな目標としたいのは、ついつい忘れてしまいがちになる「心のこもった音楽作り」ということです。練習の大半は”外見”が対象になると思いますが、そうした中で、一人一人が楽譜上の符号の意味を汲み、歌詞の表現力を磨き、それをしっかり伝えようという姿勢で積極的に音楽作りをして行けば、自然と”内実”の部分も充実していくのではないかと思います。

そういう意味で心のこもった音楽作りとは、言葉にするにはあまりに難しいものですが、ただ情のおもむくままに主観的に表現するということでなく、「その曲のその曲らしさに沿って、曲想や歌詞の単語・言葉を、その意味を考えながら十分に表現し、そしてそれを十分に磨いた伝達技術と、幅広い教養、深い感性、あたたかい人間性で一人でも多くの人に理解・共感されるように、その心に投げかけながら、永遠のものに近づこうとする行為」、とでも申しましょうか（ちょっと大げさですが）。音楽とは、即ち人間の生活の営みであり、ある時は喜び、祈り、ある時は怒り、悲しみです。積極的な音楽作りとは、それらあらゆる感情の掘り下げ、そして体現に他なりません。そのようにして理想に一歩一歩近づいて行けたらと思っています。

最後に私の好きな、吉田秀和氏の言葉を引用して結びたいと思います。

『ひとの作った音楽を歌ったり、演奏したり、聴いたりするというのは、モーツァルトや何かと話をしていることであり、自分では発見できない、いろいろな美しい話を聞かされたり何かしているあいだに、自分がより自由になり、大きくなり、あるいは軽くなり、たとえ自分では気がつかない場合があるにしても、相手といっしょになってそれまでなかった一つの新しいものを経験するということにほかならない。』

――――”春の想い”（ｶｲｴ･ﾄﾞ･ｸﾘﾃｨｸII）より

＜付録＞自分自身のいくつかの感動体験

・国内演奏旅行中ﾌｪﾘｰで外人の女の子を見つけ、数人で囲んで歌い、好評(?)だったこと。
・温泉で仲間と何曲か楽しくハモったこと。
・渡邊暁雄指揮「フィンランディア」（四連合同）人間的温かさに触れる。
・山田一雄指揮「アイヌのウポポ」（　〃　）ほとばしるエネルギーとはこのこと。
・福永陽一郎指揮「月光とピエロ」（定演）”陽ちゃんピエロ”の実体験。
・浅井敬壹指揮「岬の墓」（定演）人間はここまで表現できるのかと痛感。
・皆川達夫指揮「ミサ 大いなる神秘(Victoria)」”絹のスカーフ”体験。
・欧州演奏旅行中スイスの教会で「ミサMater Patris(J.de Prez)」16世紀に建てられた教会で歌う。魔法にかかったように、自然に力まず声が出るようになった。不思議。